広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本人のイメージの世界 ： かいまみの世界
Author(s)	上原，輝男
Citation	児童の言語生態研究 , 15 : 10 - 11
Issue Date	1997-01-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045171
Right	
Relation	

日本人のイメージの世界

――かいまみの世界――

上原輝男

1 日本人にとっての〝ま〟とは何か

このかいまみの世界という日本人の特有の感覚は、本当に素晴しい世界定めであったというふうに思うのです。かいまみで何をみようとしているのか。それは私たちに、かいまみするイメージの働きがあるから、これを見ることができるのだと言いたい。

子どものイメージの働きをトランスフォーメーションとしか言いようがないので、トランスフォーメーションと使っております。つまり、その交換、交換をする、交換ができるイメージの特徴というのは、それだと思うのです。交換できるではないか、ということを考えるようになった。

郡司正勝先生は最終講義で、「立つ」について、ふれていらっしゃいました。「日本人の立つは現実的な意識ではない。…『龍』をたつと呼んできた感覚を考えてみることです。〝身を立てる〟私の一身が立つといったイメージの中でこそ把握できる言葉である。」と。折口信夫先生のことばの中にも「古代日本人の信仰生活には、時間・空間を超越する原理がすでに備わっていた」といい、「それをそうさせるのは呪詞である。〝掛けまくも畏き……〟で始まる。それは時間・空間を転換させるのだ。」と。つまり、意識世界へ連れ去ってしまうということであります。「因明以前つまり、原因結果というような理論を思いつく以前の日本は、或いは教えられる以前の日本人の感情の論理においては、後世までも、時代地理錯誤の跡を残している。」このように考えていくと、我々は時間を超越する能力をもっているということがいえる。

いつ、どこで、誰が何をしたかなんてことを、あんまり小学校で言われすぎたために、いつという問題、時間の問題、どこでという空間の問題、誰がっていう人間の問題。こういうふうに我々は意識を分裂させてしまったことが、過ちだったのではないでしょうか。おまけに、今日は、この時間・空間・人間をばらばらに扱ってしまう、しまいつつある。私たちは、これを統合する知恵をもっていたという話を、きょうしているつもりなのです。そこで気がつかなければならないのが、時の間、空の間、そして、これを我々は、今、個体として取り扱ってしまっているのが、人の間です。本当は人間というのは、時間（じかん）、空間（くうかん）、人間（じんかん）の、ジンカンと正しくは言わなければならないと思います。私が、話したいというのは、これです。共通項を取ってみると全部〝ま〟なのです。日本人は、間がとりたいのです。

透かして見たとき、ちらりと見える。これが、かいまみであり、別次元が確定する。ほんの一瞬しか見えない。深層をみたというのも、それ。イメージとして残るというのが、これだというふうに思えるのです。ですから当然、時代錯誤は起きる。地理的錯誤が起きて、私はよかったのだと思うのです。むしろ地理的錯誤、時間的錯誤を起こさせるためのものであるというふうにすら、考えていくことができるのではないかと思います。

私のやっている仕事を、藤岡喜愛先生が、こういってくれたことがあるのです。「上原さんの考えているイメージというのは、イメージ運動を考えているのです。」というふうに名前をつけてくれた。これは、私自身、分かりやすくしてもらえたという気がする。我々はイメージを何のために使っているのか。今の人たちのイメージというのは、みんなもう三歳の童子でも知るような言葉になってしまったのですけれども、イメージが、その人間を、どう動かそうとしているかということは、まだ考えようとしていない。ところが、イメージが、我々を行動させるのです。実は、考えてみると、現実の中にイメージ生活があるのではないのです。我々のイメージが、我々の現実生活を誘導していると、考えなければならないのだと思います。

2 イメージに関する四つの仮説
予見性・邂逅性・没我性・祈祷性

「子ども文化の原像」（岩田慶治編・日本放送協会出版）という書物の中に私の章があるのですが、子どものイメージ運動の四つの仮説というのを提示しました。一つ目はイメージは予見性を持っているということです。予見という動きを我々に命じてくれる。予見、予め見た。私はあえて予見とした。予兆性でも結構なのです。兆を見た。やっているのですよ。これは私が丁寧に言葉を付けていっただけで、一般人もやっているのです。「昨日、夢を見た、私、気が悪い、私もう死ぬのではないか」これは夢に振り回されているのですね。イメージに振り回されている。

二つ目はイメージは必ず邂逅性を持っている。邂逅性。巡り会わせてくれる。巡ってくるのです。イメージはぽかっと浮かんだ知覚的なものだとみんな思ってしまっているが、そうではない。イメージは必ず巡り会いを示唆する。巡ってくるこの運動を感じるのですが、「藝談の研究」（上原輝男著・早稲田大学出版）を書いたあたりではまだ浮遊性といっていたのです。やっぱりもう、はっきりと巡るという言葉を使ってもいいのではないかと思います。巡るからこそ最期に自分の一生がすべて、だだあと出て来たとか、臨死状態になるとそれを見たとかいう。それと不思議なのは、あの人と夢の中で会ったと喜んでいるでしょう。私どうして死んだおばあちゃんと昨日夢の中で会ったのかしら。なんていう人が多いことは、誰しもうなづくところでしょう。巡り会いを喜ぶ我々の不思議な心理が潜在的にあるのではないでしょうか。

三番目に考えられるのは没我性です。夢を見ている時は完全に没我の状態にいることを忘れてはならないと思います。すべてを忘れさせてくれる。夢にいちゃもんをつける人がいますか。私は時々やってみようと。つまり夢を演出してみようと思ったことはずいぶん昔からあるのです。夜中に目が覚める。そうすると、先ほど見ていた夢の続きをもう一回見てやろう。最初は前編、次は後編、こういうふうにしてやろうと工夫してみるのですが、うまくいきません。完全に没我の状況にいるのです。つまり、我々が顕在的に持っている意識とは離れた世界の中に、人間自身、存在しているのだということを忘れてはなりません。今、こうやって目を覚ましているときの意識、これが一番基礎にあるのだと思うのは大馬鹿、むしろもう一つの世界が我々の世界をリードするのだと考えなくちゃいけない。

四つ目の仮説としては祈祷性。祈祷、お祈り。祈るという心がどういう心なのか、私にはまだよくわからない部分があるのですが、なんにしろ、そういう祈るものを我々が発見したときに、いまというのです。そういうものを発見というか自覚したとき、"いまだよ"というのです。それはこれがチャンスだなんていっているのではないのです。日本人は。"いまよ"そのいまが素晴しいから「もう」という言葉に変わるわけです。もう一度ということになるのだと思うのです。しかし、それも当然なのですよね。真ん中に神聖音、「い」のくっついている「ま」なのですから。ただならぬ「ま」なのですよ。威力を備えているまなのです。だからそれは時間だけでおさえていいのではない。いまだ。ここがね、東洋的な発想で、これだけというと私はきわめて不思議なことを言っているように思われるかもしれないけど、「啐啄同時機」ということばがある。ヒナが卵から出てくるときに親鳥は外からつついてやる、そのつつきに応じて中にいるヒナはつつき返す。このときに卵が割れる。それをやらないと生命は誕生することができない。こういうところに日本人は関心を持った。そこが教育の秘訣だというふうに考える。なぜそうだったかといえば、その辺りに私はいまという根底に据えられている感覚があったからと思うのです。命というのは常々私はいのちの「の」は助詞だと述べてきました。いのなかのち、それを命というふうに考えています。今朝、お弟子さんから「いよいよ終わりですね。」と言われた。このいよいよという発言が、私のいのちに反応をもたらせた。いよいよこれも同じことですね。いよいよという、やいゆえよの言葉を重ねていくのです。そうすると神聖に近づける、神秘が拓けるというようにどこかで思っているのではないでしょうか。

一九九三・一・二九　　於・玉川大学

イメージ運動に関する本会の研究会の考え方をより明確にするために、主宰である上原輝男氏のイメージ論を掲載した。

（編集・中川節子）